

## 原著

## 高齢者の一般高齢者イメージと自己意識との関連

棚崎由紀子<sup>1)</sup> 奥田泰子<sup>1)</sup><sup>1)</sup> 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科 老年看護学領域

## 要旨

本研究の目的は、60歳以上の高齢者が抱えている一般高齢者イメージと自尊感情などの自己意識を明らかにし、その関連性を検討するものである。調査期間は、2007年10月～11月。調査対象は、Y県内に在住し、社会的活動に参加している60歳以上の男女65名である。無記名の自記式質問紙による調査を実施した。調査内容は、①属性及び背景、②一般高齢者のイメージ（26項目の形容詞対によるSD法等）、③自己意識（自尊感情、自己受容、生活満足度等）である。

結果として、一般高齢者イメージに性差が認められた。男性に比べ女性の方がネガティブなイメージを持っていた（ $F=3.75, p<.05$ ）。年齢層別では、[地味な⇔派手な]等の形容詞対3項目において60歳代よりも70歳代の方がポジティブなイメージを持っていた（ $p<.05$ ）。イメージの違いによる比較では、高イメージ群は低イメージ群よりも年齢が高く、精神的自己に対する自己受容の高い者ほどポジティブなイメージを持っていたことが明らかとなった。各項目の関連性では、イメージと自尊感情や生活満足度などの自己意識との関連性のあることが認められ、今の自分自身をどのように受け止めているかが、一般高齢者イメージに影響していることが示唆された。

キーワード：一般高齢者イメージ、自尊感情、自己受容、SD法

## I. 緒言

長寿国であるわが国の高齢者ケアに対する社会的ニーズは年々高まりをみせており、日々の生活や健康をいかに充実させて年を重ねていくかが高齢者の大きな課題となっている。

現在、年をとることを機能低下や喪失といった否定的側面から捉えるのではなく、サクセスフル・エイジング（Successful aging）<sup>1)2)</sup>など「人間の発達」という肯定的な側面から捉えようとする動きが活発化している。そして、「老年期」の生活の質（QOL: Quality of life）、生き方そのものに着目した様々な研究が取り組まれている。

しかし、その反面で身体機能の低下、様々な死・別離や役割などの喪失体験、人間関係の縮小や希薄化による孤立、経済状況の変化等が複雑に影響し合い、こころの健康を維持できない高齢者も多い。高齢者の自殺者<sup>3)</sup>、うつ病の増加<sup>4)</sup>は、今や社会問題となっている<sup>5)</sup>。

このような現状の中、高齢者自身が自分の望む生活を実現し、健康を維持できるように支援することは老年看護においてとても重要な課題であり、高齢者を対象にした健康支援及び教育の充実は、急務の役割といえる。そのためには、まず、高齢者の実態を把握する

ことが重要な基礎となる。

本研究では、各個人の一般高齢者に対するイメージが、老年期の生き方にも大きく反映するのではないかと仮説に基づき、60歳以上の高齢者が抱えている一般高齢者に対するイメージを明らかにし、それらが自尊感情、自己受容等の自己意識とどのように関連しているのかを検討していく。

これまで高齢者イメージや老人イメージについての研究は、数多く行われているが、大学生を対象にしたものが多く<sup>6)</sup>、高齢者自身を対象に行った研究は数少ない。

看護学生を対象としたものでは、一般大学生と看護学生のイメージの比較、看護実習や老年看護学など授業に関連した変化などが報告されている<sup>7)9)</sup>。看護学生の高齢者観は、高齢者の身体機能低下については否定的な見方であっても、心理的・情緒的側面や人生経験・生き様を含めおおむね肯定的で、多様でかつ個別的な見方へと望ましい変化をしていると報告されている<sup>10)</sup>。

高齢者を対象にしたものではないが、古谷野ら<sup>11)</sup>が行った中高年の老人イメージの研究では、中高年者の老人イメージは、全体として中立的で、中立点よりわずかに肯定的な方向に偏っていたと報告している。

一方、自尊感情に関する先行研究は、様々な年代を対象に数多く行われてきたが、中でも、高齢者は、加齢による身体機能の低下や社会的役割の喪失、ライフイベントの捉え方、環境の変化などから、自己否定や自己への不満足を感じ、自尊感情を低下させる傾向にあると報告されている<sup>12) 13)</sup>。

自尊感情を維持することは、上手に老いるための最も重要な素質であり、生活の質を維持するためにも欠かせない要素であると考えられる。

本研究では、老年期を過ごしている人々が自分自身に対してどのように感じ、捉えているのかを、一般高齢者のイメージとともに自尊感情等の自己意識との関連性にて検討し、更に、高齢者の健康支援及び教育への示唆を得ることを目的とする。

## II. 用語の定義

### 1. イメージ (image)

：心の中に思い浮かべる像、全体的な印象。

### 2. 自己意識 (self-consciousness)

：自分自身に関する意識。自尊感情、自己受容等を示す。

## III. 研究方法

### 1. 調査対象

対象は、大学主催のシルバーカレッジや自主的に運営されている写真クラブ他のサークル活動などの社会的活動に参加している 60 歳以上の男女計 100 名を対象にした。

### 2. 調査期間 2007 年 10 月~11 月

### 3. 調査項目

#### 1) 属性及び背景

：暦年齢、性別、婚姻状況、家族形態、就業の有無、健康状態（入院経験・通院の有無）、異世代交流の機会の有無、認知症の介護経験の有無 等。

#### (1) 将来の高齢者像の有無

：「自分はこうありたいという高齢者像をお持ちですか？」という設問に対して、「はい：1 点」「いいえ：2 点」の 2 項目より回答を求めた。

#### (2) 挑戦対象の有無

：「実行する、しないに関わらず、これから挑戦してみたいと思っていることはありますか？」という設問に対して、「はい：1 点」「いいえ：2 点」の 2 項目より回答を求めた。

#### (3) 生きがいの有無

：「生きがいを感じていますか？」という設問に対して、「大いに感じている：1 点」から「全く感じてい

ない：4 点」までの 4 件法にて評定を求めた。

### 2) 一般高齢者のイメージ

#### (1) 一般高齢者イメージ (SD 法) …図 1

：一般高齢者のイメージを捉えるために、SD (semantic differential method) 法を用いた。

形容詞対は、古谷野ら<sup>14)</sup> が老人イメージ調査で使用した 19 項目に、研究者が 7 項目追加した 26 項目を設定した。

評定は、否定的な形容詞から肯定的な形容詞にむけて「非常に：1 点」「どちらかというと：2 点」「どちらともいえない：3 点」「どちらかというと：4 点」「非常に：5 点」の 5 件法とした。更に、各項目の評定点の他に 26 項目全ての評定点を合計し、イメージ総合得点とした（最高 130 点：以下、イメージ総合得点とする）。

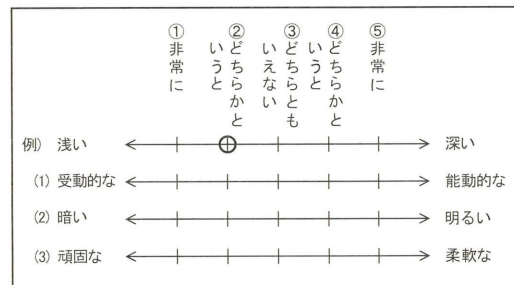


図 1 26 項目の形容詞対 SD 法の一部

#### (2) 高齢者の定義年齢

：「何歳以上が高齢者（おじいちゃん、おばあちゃん）だと思いますか？」という設問に対して、「およそ 55 歳以上：1 点」から「およそ 85 歳以上：7 点」までの 5 歳単位の 7 項目より評定を求めた。

#### (3) 一般高齢者に対する偏見、差別の認識

：「高齢者に対する偏見（差別）があると感じていますか？」という各設問に対して、「大いに感じている：1 点」「多少感じている：2 点」「あまり感じない：3 点」「まったく感じない：4 点」の 4 件法により評定を求めた。

### 3) 自己意識

#### (1) 自尊感情尺度 (山本ら)<sup>14)</sup>

：自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じるかという感じ方のことであり、自己の能力や価値について評価的な感情や感覚のことである。本研究では、Rosenberg の作成した自尊感情尺度 (Self-Esteem Scale) 10 項目の邦訳版を用いた。「あてはまる：5 点」から「あてはまらない：1 点」までの 5 件法の評定を、単純加算した。逆転項目については、5 点⇒1 点、4 点⇒2 点に換算して加算した。

(2) 生活満足度 K 尺度 (LSI-K) <sup>15)</sup>

：主観的幸福感として、古谷野らの作成した LSI-K を用いた。【人生全体に関する満足感】【心理的安定】【老いについての評価】の 3 因子 9 項目の設問に対して 2 ないし 3 個の選択肢から 1 つ選択し、設定されている点数を加算して合計得点を算出した。

(3) 自己受容測定尺度 (沢崎) <sup>16)</sup>

：自己受容とは、ありのままの自分をそのまま受け入れている状態である。本研究では、沢崎の【身体的自己】【精神的自己】【社会的自己】【役割的自己】【全体的自己】の 5 領域からなる 35 項目の尺度を用いた。「積極的受容：5 点」から「積極的否定：1 点」までの 5 件法で評価し、各領域に単純加算した。さらに、各領域の下位尺度得点を合計し、全体の尺度得点とした。

(4) 高齢者としての自覚

：「自分は、高齢者 (おじいちゃん、おばあちゃん) だと思いますか？」という設問に対して、「大いに感じている：1 点」から「全く感じていない：4 点」までの 4 件法の評定を求めた。

(5) 暦年齢と認識している体力および精神年齢との差：「今思っている、自分の体力年齢 (精神年齢) は何歳ですか？」という各設問に対する認識年齢を実数で求め、暦年齢との差を計算した。

4. 実施方法

無記名の自記式質問紙による調査を実施し、留め置き法にて回収した。回収した 73 名の内 (有効回収率 73%)、古谷野ら <sup>17)</sup> の老研式活動能力指標得点 10 点以下の者を除く、計 65 名を分析対象とした (有効回答率：89.0%)。

5. 分析方法

対象を下記の項目 1) ~3) によって分類し、統計解析ソフト SPSS11.0 J を使用して単純集計を行い、以下の内容で比較及び関連性を検討した。

1) 男女別

2) 年齢層別：60, 70, 80 歳代の 3 グループに分類。

3) 一般高齢者イメージ (SD 法) の総合得点別 (2 群)：ネガティブなイメージの低イメージ群 (低得点)、ポジティブなイメージの高イメージ群 (高得点) の 2 群に分類した (詳細は後述)。

各群との比較については、1) では一要因の分散分析を用い、2) では一要因の分散分析後に、Bonferroni 法による多重比較を行った。3) では、Mann-Whitney の U 検定を行った。

2 群間の関連性の検討については、1) 2) 3) の全てにおいて Spearman 順位相関係数にて検討した (但し、

3) は 60 歳代、70 歳代の 2 群間のみ実施した)。

有意水準は、それぞれ 5% 未満を採用した。

6. 倫理的配慮

事前に口頭および文書にて、研究の趣旨・内容について説明した。さらに、研究協力は自由意思であり、研究結果は匿名性を確保すること、留め置き期間内の回収をもって同意とすることを追記した。また、得られた情報は本研究のみに使用し、研究結果については対象者に報告する旨を伝え、実施した。

IV. 結果

1. 属性および背景

対象の属性及び背景の詳細について表 1 に示した。対象は、男性 39 名 (平均年齢：70.51 ± 5.27 歳)、女性 26 名 (平均年齢：69.69 ± 6.32 歳) の計 65 名で、

表 1 対象者の属性及び背景

		n	%
性別	男性	39	60.0
	女性	26	40.0
婚姻状況	既婚	50	76.9
	離・死別	12	18.5
	未婚	2	3.1
	その他	1	1.5
家族形態	独居	11	16.9
	夫婦のみ	37	56.9
	核家族	8	12.3
	2世帯同居	4	6.2
	3世帯同居	3	4.6
	その他	2	3.1
就業の有無	有	8	12.3
	無	57	86.2
健康状態	入院あり	35	53.8
	入院なし	30	46.2
	通院あり	39	60.0
	通院なし	26	40.0
異世代交流の機会	大いにある	13	20.0
	多少ある	34	52.3
	あまりない	14	21.5
	全くない	4	6.2
生きがい	大いにある	24	36.9
	多少ある	32	49.2
	あまりない	9	13.8
認知症者の	はい	13	20.0
介護経験	いいえ	52	80.0
体力年齢差		- 6.22 ± 6.29 歳	
精神年齢差		- 13.44 ± 8.72 歳	

平均年齢は 70.18±5.68 歳であった。

65 名中独居者は、11 名 (16.9%) であり、仕事をしている者は、8 名 (12.3%) であった。異世代交流の機会については、65 名中 47 名 (72.3%) が「大いにある」「多少ある」と感じており、生きがいは、65 名中 56 名 (86.1%) が「大いにある」「多少ある」と感じていた。認知症者の介護経験については、65 名中 13 名 (20.0%) に介護経験があった。

### 1) 一般高齢者イメージ

26 項目の形容詞対による一般高齢者イメージを表 2 に示した。

26 項目中、平均値 3.0 以上の評価の高かった項目は 6 項目のみであった。最も評価の高いポジティブなイメージを持っていたのは[冷たい⇔暖かい (3.15±.69)] の項目であり、その他[騒がしい⇔静かな (3.14±.68)]、[憎らしい⇔愛らしい (3.11±.73)] などであった。

また、最も評価の低いネガティブなイメージを持っていた項目は[遅い⇔速い (2.45±.77)] であった。

26 項目形容詞対のイメージ総合得点は、130 点中 73.91±13.33 点であった。

表 2 一般高齢者イメージ 26 項目形容詞対 (n=65)

26項目形容詞対	平均値	SD
1 遅い⇔速い	2.45	.77
2 枯れた⇔みずみずしい	2.60	.73
3 弱い⇔強い	2.60	.77
4 受動的な⇔能動的な	2.62	.91
5 鈍感な⇔機敏な	2.63	.76
6 頑固な⇔柔軟な	2.66	.87
7 孤立⇔連帯	2.69	.88
8 地味な⇔派手な	2.72	.75
9 不活発な⇔活発な	2.74	.85
10 強情⇔素直	2.74	.96
11 灰色⇔バラ色	2.74	.78
12 きびしい⇔にぎやかな	2.77	.90
13 消極的な⇔積極的な	2.78	.84
14 劣った⇔優れた	2.80	.67
15 悲観的⇔楽観的な	2.82	.86
16 不健康⇔健康	2.91	.82
17 下品な⇔上品な	2.92	.62
18 暗い⇔明るい	2.97	.87
19 親密⇔疎遠	2.97	.61
20 嫌いな⇔好きな	2.98	.74
21 無愛想な⇔愛想のよい	3.03	.71
22 きびしい⇔やさしい	3.06	.61
23 落ち着きのない⇔落ち着きのある	3.09	.74
24 憎らしい⇔愛らしい	3.11	.73
25 騒がしい⇔静かな	3.14	.68
26 冷たい⇔暖かい	3.15	.69

高齢者の定義年齢については、23 名 (35.4%) が「70 歳以上」、22 名 (33.8%) が「75 歳以上」と回答していた。

高齢者に対する偏見の認識については、65 名中 25 名 (39.1%) が「大いに感じている」「多少感じている」と回答し、差別については、28 名 (43.1%) が「大いに感じている」「多少感じている」と感じていた。

### 2) 自己意識

自尊感情は、35.03±4.86 点であり、生活満足度は、4.69±2.0 点であった。自己受容全体の尺度得点は、133.11±18.17 点であった。

高齢者としての自覚については、25 名 (38.5%) が「大いに感じている」「多少感じている」と回答しており、暦年齢と体力年齢 (精神年齢) との認識の差は、体力年齢 6.22±6.29 歳、精神年齢 13.44±8.72 歳と、どちらも暦年齢より若く意識していた (表 1)。

### 2. 性別による比較及び関連性

#### 1) 属性および背景

男女別年齢層の分類を、表 3 に示した。

性別による比較で有意な差が認められた項目は、独居の割合と健康状態の 2 項目のみであった。

独居の割合は、男性よりも女性の方が多く (F=6.30, p<.05) (表 4, 図 2)、通院や入院経験は男性の方が多かった (通院 : F=13.74, 入院 : F=4.27, p<.05) (図 3)。

表 3 男女別年齢層の人数 (n=65)

	男性		女性		合計
	n	%	n	%	
60歳代	20	62.5	12	37.5	32
70歳代	17	58.6	12	41.4	29
80歳代	2	50.0	2	50.0	4
合計	39	60.0	26	40.0	65

表 4 男女別独居の人数 (n=65)

分類	性別		合計
	男性	女性	
独居	3	8	11
独居以外	36	18	54
合計	39	26	65

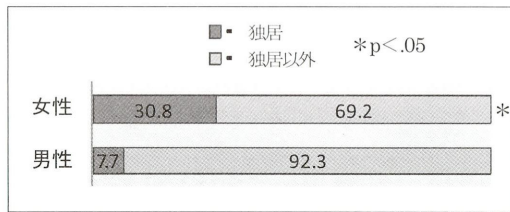


図2 男女別独居の割合 (%) (n=65)

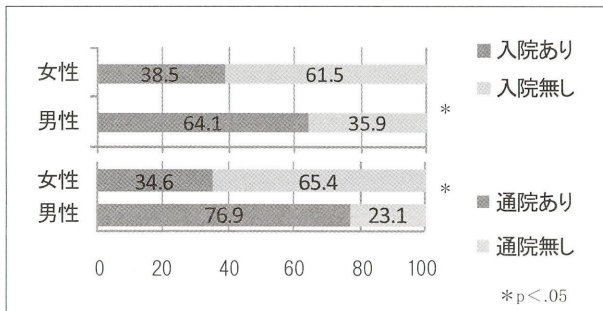


図3 男女別健康状態の割合 (%) (n=65)

2) 一般高齢者のイメージ

26項目形容詞対のイメージ総合得点を、男女別に比較したところ、男性は女性よりも高評価のポジティブなイメージを持っていた (F=3.75, p<.05)。

26項目の各形容詞対の比較では、7項目に有意な差が認められた (表5)。  
 [不活発な⇔活発な (F=13.15, P<.05)], [鈍感な⇔敏感な (F=4.79, P<.05)], [さびしい⇔賑やかな (F=8.95, p<.05)] 等であり、7項目全て女性の方が男性よりも評価の低いネガティブなイメージを持っていた。

高齢者の定義年齢、高齢者に対する偏見・差別の認識については、有意な差は認められなかった。

表5 男女別一般高齢者イメージの比較 (n=65)

	女性(n=26)		F値	男性(n=39)	
	平均値	SD		平均値	SD
1 [不活発な⇔活発な]	2.31	.79	13.15*	3.03	.78
2 [鈍感な⇔敏感な]	2.38	.80	4.79*	2.76	.70
3 [寂しい⇔賑やかな]	2.38	.94	8.95*	3.03	.79
4 [孤立⇔連帯]	2.38	.94	5.65*	2.90	.79
5 [灰色⇔バラ色]	2.46	.81	5.94*	2.92	.70
6 [消極的な⇔積極的な]	2.50	.76	5.33*	2.97	.84
7 [悲観的⇔楽観的]	2.54	.81	4.71*	3.00	.86

\*p<.05

3) 自己意識

自尊感情や自己受容の程度、生活満足度等の自己意識については、男女の有意な差は認められなかった。

4) 関連性について

調査項目との関連性については、男性では、【自尊感情】と自己受容の【精神的自己】との間に正の相関 (rs=.67, p<.05) が認められた。

女性では、【自尊感情】と自己受容の【精神的自己】 (rs=.64, p<.05), 【生活満足度】 (rs=.63, p<.05) との間に正の相関が認められた。【異世代交流の機会】と【高齢者の定義年齢】 (rs=-.67, p<.05), 【入院経験】と【挑戦対象の有無】 (rs=-.72, p<.05) との間に負の相関が認められた。

26項目の各形容詞対では、男性は、自己受容の【精神的自己】と【暗い⇔明るい】 (rs=.50, p<.05), 【さびしい⇔にぎやかな】 (rs=.53, p<.05) との間に正の相関が認められた。女性は、自己受容の【社会的自己】と【受動的⇔能動的】との間に正の相関 (rs=.61, p<.05) が認められた。

3. 年齢層別の比較及び関連性

1) 属性および背景

年齢層別による分類を表3に示した。60, 70, 80歳代の各人数は、60歳代32名 (49.2%), 70歳代29名 (44.6%), 80歳代4名 (6.2%) であった。

年齢層別の比較では、80歳代は、【挑戦対象】を持っている者が、60歳代や70歳代よりも有意に少なかった (p<.05)。その他の属性及び背景の項目には、有意な差は認められなかった。

2) 一般高齢者のイメージ

26項目形容詞対のイメージ総合得点を年齢層別に比較したところ、有意な差は認められなかった。

26項目形容詞対それぞれの各年齢層別の比較においては、60歳代と70歳代との間に3項目の有意な差が認められた (表6)。  
 [地味な⇔派手な], [劣った⇔優れた], [下品な⇔上品な]の3項目において、70歳代は60歳代よりも評価が高く、ポジティブなイメージを持っていた (p<.05)。

表6 年齢層別一般高齢者イメージの比較 (n=61)

	60歳代(n=32)		70歳代(n=29)	
	平均値	SD	平均値	SD
1 [地味な⇔派手な]	2.45	.72	2.97	.73 *
2 [劣った⇔優れた]	2.59	.71	3.03	.57 *
3 [下品な⇔上品な]	2.72	.68	3.14	.52 *

\*p<.05

3) 自己意識

自己意識の各項目を比較したところ、【高齢者意識】、【暦年齢と精神年齢の認識との差】、【生活満足度】の3項目に有意な差が認められた。

70 歳代は自分を高齢者と自覚している者が、60 歳代と比べ多かった ( $p<.05$ ).

【暦年齢と精神年齢との差】では、80 歳代の差は $-23.75\pm 6.85$  歳であり、60 歳代の $-12.42\pm 9.70$  歳に比べて、随分若く認識していた ( $p<.05$ ).

【生活満足度】では、70 歳代の得点は  $5.24\pm 2.21$  点であり、80 歳代の  $2.50\pm 0.58$  点と比較して有意に高かった ( $p<.05$ ).

#### 4) 関連性について

調査項目との関連性については、60 歳代では、【自尊感情】と自己受容の【精神的自己】 ( $r_s=.82, p<.05$ ),

【全体的自己】 ( $r_s=.73, p<.05$ ) との間に、【生活満足度】と自己受容の【全体的自己】 ( $r_s=.73, p<.05$ ) との間に正の相関が認められた。

70 歳代では、【生活満足度】と自己受容の【社会的自己】との間に正の相関 ( $r_s=.60, p<.05$ ) が認められた。

26 項目の各形容詞対では、60 歳代では、0.6 以上の相関係数の項目は認められなかったが、70 歳代では、自己受容の【精神的自己】と【下品な⇔上品な】との間に正の相関 ( $r_s=.62, p<.05$ ) が認められた。

#### 4. 一般高齢者イメージの違いによる比較及び関連性

一般高齢者イメージの 26 項目形容詞対 (SD 法) の総合得点より、25 パーセンタイルの 66.0 点、75 パーセンタイルの 80.0 点を基準にして、ネガティブなイメージをもっている得点の低い (43~66 点) 群 (以下、低イメージ群)、イメージ得点が中間 (67~79 点) の群 (以下、中間イメージ群)、ポジティブなイメージをもっている得点の高い (80~108 点) 群 (以下、高イメージ群) の 3 群に分類した。

本研究では、低イメージ群と高イメージ群についてのみ比較検討を行った。

##### 1) 属性および背景

イメージ総合得点の低イメージ群と高イメージ群の人数を表 7 に示した。低イメージ群は 17 名 (26.2%)、高イメージ群 19 名 (29.2%) であった。

表 7 イメージ総合得点別人数 (n=36)

分類	性別		合計
	男性	女性	
低イメージ群	8	9	17
高イメージ群	14	5	19
合計	22	14	36

属性および背景を比較したところ、【年齢】に有意な差が認められた。平均年齢は、低イメージ群では 66.0

±2.3 歳、高イメージ群では 72.0±5.0 歳であり、高イメージ群の方が有意に高かった ( $Z=-2.67, p<.05$ ) (表 8)。

表 8 イメージ群別年齢

	年齢	SD
低イメージ群	66.0	2.3
高イメージ群	72.0	5.0

† Mann-Whitney U 検定 \* $p<.05$

##### 2) 自己意識

自己意識の各項目を比較したところ、自己受容の【精神的自己】と【暦年齢と精神年齢との認識の差】の 2 項目に有意な差が認められた。

自己受容の【精神的自己】は、高イメージ群  $63.0\pm 7.0$  点、低イメージ群  $56.0\pm 5.5$  点であり、高イメージ群の方が有意に高かった ( $Z=-2.27, p<.05$ ).

【暦年齢と精神年齢との認識の差】は、高イメージ群は $-17.0\pm 7.5$  歳、低イメージ群は $-9.0\pm 3.5$  歳と、高イメージ群の方が若く認識していた ( $Z=-3.17, p<.05$ ).

##### 3) 関連性について

調査項目の関連性については、高イメージ群では、0.6 以上の相関係数の項目は認められなかった。

低イメージ群では、【生活満足度】と自己受容の【社会的自己】 ( $r_s=.70, p<.05$ ), 【全体的自己】 ( $r_s=.73, p<.05$ ) との間に、【自尊感情】と自己受容の【精神的自己】 ( $r_s=.75, p<.05$ ), 【全体的自己】 ( $r_s=.79, p<.05$ ) との間に、【異世代交流の機会】と【生きがい】 ( $r_s=.75, p<.05$ ) との間に正の相関が認められた。【暦年齢と認識している精神年齢との差】と自己受容の【精神的自己】 ( $r_s=-.71, p<.05$ ), 【社会的自己】 ( $r_s=-.79, p<.05$ ) に負の相関が認められた。

26 項目の各形容詞対については、高イメージ群では自己受容の【身体的自己】と【鈍感な⇔敏感な】とに負の相関が認められた。低イメージ群では、自己受容の【身体的自己】と【消極的な⇔積極的な】 ( $r_s=-.61, p<.05$ ), 【枯れた⇔みずみずしい】 ( $r_s=-.64, p<.05$ ) との間に負の相関などが認められた。

#### V. 考察

本研究では、60 歳以上の高齢者を対象に、一般高齢者のイメージと自尊感情、自己受容、生活満足度等の自己意識を明らかにし、その関連性を検証した。

##### 1. 対象者の特性

本研究では、平均年齢  $70.18\pm 5.68$  歳の 65 名を対象に調査を行った。シルバーカレッジや写真クラブなど日頃から社会的活動に参加している活動的な 60 歳以上の高齢者が対象であったことから、現在、生きがい

を持っていると答えた者は「大いにある」「多少ある」を合わせて85%以上であり、世代交流の機会についても、「大いにある」「多少ある」を合わせて70%以上を占めた。様々な交流の機会にも恵まれ、生きがいを持って積極的に活動をしている対象であったと言える。

## 2. 一般高齢者イメージとその関連性

### 1)男女差

26項目形容詞対のイメージ総合得点の比較にて、女性は男性よりも低評価のネガティブなイメージを持っていた。

また、全対象者の26項目形容詞対による一般高齢者のイメージについては、中立点である3.0以上の項目が6項目、2.5以下の項目は1項目認められ、「遅い」、「枯れた」、「弱い」、「暖かい」、「にぎやか」、「愛らしい」というイメージに特徴付けられた。

中でも女性は、男性よりも否定的な「鈍感な」、「不活発な」、「孤立」に代表されるネガティブなイメージを持っていた。女性は、男性より通院状況や入院経験が少なく、その点から健康であるがゆえに一般高齢者イメージを今の自分とは異なった対象として捉えているのではないかと推測された。

また、女性は自己意識だけではなく、異世代交流の機会がある者ほど高齢者の定義年齢を高く認識していた。様々な年代と交流機会のある女性ほど、高齢者の定義年齢を自分の年齢とはかけ離れたものとして認識しており、これもある意味「高齢者」を自分とは一線をおいた存在であると捉えている心の現れがこれらの結果に反映したのではないかと考える。

さらに、女性特有の老いに対する嫌悪感、抵抗感、美しさとの対極にあるものとして捉え、いつまでも若くありたいと願う若さへの追求等も影響しているのではないかと考える。

### 2)年齢差

統計的に検定を行っていないが、古谷野ら<sup>14)</sup>の調査した中高年(平均年齢54.0歳)の老人イメージと同じ19項目の形容詞対の平均値と比較した場合、3.0以下の形容詞対は、古谷野らの調査対象では4項目のみであったのに対し、本研究の対象者60歳以上の高齢者(平均年齢:70.18±5.68歳)では14項目が該当した。つまり、10年以上前の先行研究ではあるが、60歳以上の活動的な本研究の高齢者よりもさらに年齢の低い先行研究の中高年の方が、一般高齢者イメージを肯定的に捉えている者が多かったといえる。

しかし、本研究の対象を年齢層別に検討した結果、60歳代は70歳代に比べて、「地味な」、「下品な」、「劣った」の3項目ではあったがネガティブなイメージを持っていた。

60歳代と70歳代との自尊感情、自己受容等の自己意識について有意な差は認められなかったが、70歳代と比較して60歳代の高齢者意識が低かったこと等をふまえ、老年期を前にした「老い」への受容・適応状況の違いが関連しているのではないかと推測された。また、70歳代は80歳代に比べて生活満足度が高く、70歳代では、精神的自己に対する自己受容が高い者ほど「上品な」という肯定的なイメージを持っていた。

今後は、対象数を増やし、高齢者以外の対象者と比較し、自尊感情、自己受容等の自己意識の違いを検証していきたいと考える。

### 3)イメージの違い

一般高齢者に対する高イメージ群は、低イメージ群よりも72.0±5.0歳と年齢が高く、精神的側面における自己受容得点が高く、暦年齢よりも-17.0±7.5歳若く精神年齢を認識していた。また、身体的自己に対する自己受容の高い者ほど「敏感な」肯定的なイメージを持っており、低イメージ群では、身体的自己に対する自己受容の高い者ほど「積極的な」、「みずみずしい」肯定的なイメージを持っていた。

よって、一般高齢者イメージに影響する直接的な因子として、年齢、精神的自己に対する自己受容と、精神年齢差が認められた。

以上の結果より、一般高齢者イメージは、自分自身に対する意識、すなわち自尊感情、自己受容の程度、生活満足度等が関連していることが推察された。また、一般高齢者イメージの関連因子に年齢が認められたが、今後、更なる検証が必要であると考えられる。

特に、70歳代に比べ何故イメージが否定的であったのか、60歳代の一般高齢者に対するネガティブなイメージの要因について、「老い」の受容という視点から検証する必要があるのではないかと考える。

更に、長寿国としての社会的問題に認知症者の増加がある。老いの不安因子として一般高齢者イメージに認知症に対するとらえ方が関連しているのではないかと考えられたが、認知症の介護経験についての直接的な関連性は認められなかった。

日々自覚している加齢に伴う自分自身の様々な変化を各個人がどのように受け止めているかを明確にすることはとても重要であり、小松らは老後の生活への意識(向老意識)には、各個人の健康感や生活満足度などの現在の生活状況が密接に関連している<sup>18)</sup>と述べている。

本研究においても同様に、生活満足度との関連性が認められ、各個人が今の生活をどのように感じているか、自分自身をどの程度受容しているのかが重要な鍵であることが明らかとなった。

水上<sup>20)</sup>は、老年期において主観的健康感を良好に維持するためのひとつの要因として、老いの自己評価という心理的側面の重要性を報告している。また、老年期においては、高齢者自身が「老い」という現象に心理的な側面から適切に適応していくようなプロセスを検討することも重要な要因と指摘している。

本研究では、一般高齢者のイメージという面から「老い」を捉えたが、「老い」を知覚する個人差、すなわち人が加齢に伴う変化をどのように認知するのかという側面にも注目し、個別に自己評価できるツールの開発も視野に、今後検討していく内容であると考え。

人生において老年期は、自分なりの人生を完成させる大切な時期でもある。イメージが生き方にも大きな影響を与えることを踏まえ、今の自分を認め、適応できるように健康支援をしていきたいと考える。

## VI. 結論

本研究では、60歳以上の高齢者を対象に、一般高齢者イメージと自尊感情、自己受容、生活満足度等の自己意識を明らかにし、その関連性を検討した。

1. 肯定的な一般高齢者イメージを持っている人は、女性よりも男性のほうが多く、年齢も高かった。
2. 一般高齢者に対するイメージには、自尊感情、自己受容の程度、生活満足度が関連していた。

## VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、高齢者を対象に一般高齢者イメージと自己意識との関連を検討したものであるが、対象数が65名と少なく、60歳以上の各年齢層間の十分な関連性を検証することができなかった。今後は、対象数を増やし中高年との比較検討から「老い」に対する関連因子を抽出していきたいと考えている。

## 謝辞

本研究に快くご協力してくださいました T 様、和同会常盤台病院の看護部長をはじめスタッフの皆様方に深く感謝をし、お礼申し上げます。

本研究は、日本看護研究学会中国・四国地方会第21回学術集会において報告したものに、データを追加し、まとめたものである。

## 文献

- 1) Rowe, John W. & Robert L. Kahn: Human Aging Usual and Successful Aging, Science, 237, 143-149, 1987.
- 2) 福岡和美, 大西早百合, 他: 中高年におけるサクセスフルエイジングに向けての準備行動とその要因に関する研究, 県立長崎シーボルト大学 看護栄養学部紀要, 3,

67-83, 2002.

- 3) 警視庁生活安全局地域課: 平成19年中における自殺の概要資料  
[http://www.nPa.go.jp/toukei/chiki10/h19\\_zisatsu.Pdf](http://www.nPa.go.jp/toukei/chiki10/h19_zisatsu.Pdf)
- 4) 厚生労働省「患者調査」平成17年
- 5) 自殺総合対策大綱  
<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/taikou/Pdf/20081031taikou.Pdf>
- 6) 大谷英子・松木光子: 老人イメージと形成要因に関する調査研究 (1)大学生の老人イメージと生活経験の関連, 日本看護研究学会雑誌, 18(4), 25-38, 1995.
- 7) 六角僚子: 高齢者観比較—看護婦と一般・看護学生の場合—, 日本老年看護学会第3回, 74, 1998.
- 8) 多田敏子: 老人看護学における臨地実習による看護学生の高齢者に対する印象の変化, 日本老年看護学, 1(1), 63-70, 1996.
- 9) 藤巻尚美・流石ゆり子, 他: 高齢者疑似体験を組み入れた健康高齢者実習による看護学生の高齢者イメージの変化—高齢者の活動性・自律性のイメージに焦点を当てて—, 日本老年看護学会第12回学術集会 抄録集, 210, 2007.
- 10) 奥野茂代: 老年看護における高齢者観の再考, 老年看護学, 7(1), 5-11, 2002.
- 11) 古谷野亘他: 中高年の老人イメージ—SD法による測定—, 老年社会科学, 18(2), 147-152, 1997.
- 12) 水野敏子: 「呼び寄せ」老人の実態から探る保健婦の役割—調査結果に見るリスクの少ない呼び寄せ方, 求められるサポーター—, 生活教育, 42(12), 7-11, 1998.
- 13) 藺牟田洋美・下仲順子, 他: 中高年期におけるライフイベントの主観的評価・予測性と心理的適応との関連—家族関係と職業ライフイベントを中心として—, 老年社会科学, 18(1), 63-73, 1996.
- 14) 山本真理子, 松井 豊, 他: 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30, 64-68, 1982.
- 15) 古谷野亘・柴田博他: 生活満足度尺度の構造—因子構造の普遍性—, 老年社会科学, 12, 102-116, 1990.
- 16) 沢崎達夫: 自己受容に関する研究(1)—新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討, カウンセリング研究, 26, 29-37, 1993.
- 17) 古谷野 亘, 柴田 博, 他: 地域老人における活動能力の測定; 老研式活動能力指標の開発, 日本公衆衛生雑誌, 34(3), 109-114, 1987.
- 18) 小松光代, 岡山寧子, 他: 中高年の考える老後の生活, 京都府立医科大学医療技術短期大学紀要, 10, 167-177, 2000.
- 19) 水上喜美子: 高齢者の主観的健康感と老いの自覚との関連性に関する検討, 老年社会科学, 27(1), 5-16, 2005.



## Relation between senior citizen image in old age and sense of self

Yukiko Tanasaki Yasuko Okuda

Department of Nursing, Faculty of Health Science Ube Frontier University

### Abstract

The present study aimed to reveal correlations among senior citizen image, self-esteem, and self-acceptance etc. The survey was of an anonymous self-report style. The survey content included questionnaire items on attributes, and senior citizen image (the Semantic Differential: SD), the self-consciousness scale (self-esteem, self-acceptance, Life Satisfaction Index K : LISK etc.). The subjects were 65 healthy and active people aged over 60 years.

The results were as follows:

- (1) Women's senior citizen image was more negative than men's image ( $F=3.75, p<.05$ ).
- (2) The 70's senior citizen image was more positive than the 60's image, such as "plain-flamboyant" ( $p<.05$ ).
- (3) The average age of the high-image score group of 72.0 ( $SD=5.0$ ) differed significantly from the average age of the low-image score group of 66.0 ( $SD=2.3$ ) ( $Z=-2.67, p<.05$ ).
- (4) The high score group on a mental side of the self-receipt had a positive senior citizen image.
- (5) The senior citizen image correlated closely with self-consciousness (self-esteem, self-acceptance etc).

Therefore, these results suggest that senior citizen image changes by how they themselves accept it.

\* key words : senior citizen image, self-esteem, self-acceptance, semantic differential method.

